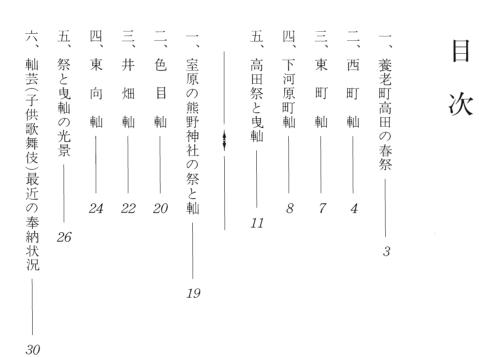
はじめのことば

高田愛宕神社の春祭は宝暦年間、 室原熊野神社の秋祭は文化年間から夫々軕が出

保存会の方々にご協力いただき深く感謝の意を表します。 活用にいささかでも寄与できれば幸いに存じます。この書を刊行するにあたり、 り深く理解していただくための手引書として皆様に広く利用され、 ます。この冊子は、 機に一層維持・管理に意を用い地元保存会のご理解とご協力をお願いしたいと思い ればなりません。この度、幸いに県重要有形民俗文化財に指定されましたのを契 に感謝し、受け継いだ、再び入手の出来ない貴重な文化財、 は並たいていのものではなかったかと存じます。私達は、この先輩達の努力と労苦 もか、わらず、この長い年月を維持管理して来られた地元保存会の皆様方のご労苦 造し維持したもので、多くの経費と労力がかかり、又度々町内の火災に類焼したに され、近在から多くの人が参集して賑やかに行なわれます。 この夫々の軕は、 各軸の由緒と祭の様子を簡単にわかりやすく書いたもので、よ ずっと昔から我々の先輩達が、高い文化と芸能性をもって、 軸を大切に保存しなけ 文化財の保護 建 両

昭和五十六年三月

養老町教育委員会 教育長 二 輪 良 二



養老町高田の春祭



氏神 鬱若神社(高田西町の本通り沿いに在) 祭神 火産霊神

声、 楽軕 得もいわれぬ、 や奉行等が選ば 十九日に行われる。 かに進み、 適な横笛、 当日 軕の由緒については、これから一つ一つ説明を加えるが、 拍子木の音も勇ましく、 常盤 は 町 太鼓の 西町 処々で留って、 の芸軸 あでやかで壮厳でもある。 れ 0 囃、 猩 町を挙げての盛大な祭となる。 各町内では五月に入れば、 (出さなくなった)の四輛が曳かれ、 Q 礼軸、 謡と揃いの法被・ 夫々の舞や芸を演じて行く様は、 東町 重い 0 軕がぎゅぎゅと軋りつつ静 林 和 靖 Ø 軕 かた姿の軕曳 下 夫々祭の委員 河 原 優雅で快 町 $\widetilde{\sigma}$ 0

掛

神

養老町高田に鎮座する愛宕神社 (火産霊神) の春祭は毎年五月

しい組織の高田曳軕保存会を設立した。 なお、 この軕の保存については、 昭和五五年九月一 一日に新

具体的に述べることにする。

それが終ると、

この祭の叙文の続きともなる祭と軕の光景を

は寛政六年閏十一月の高田町の 宝暦十二年(一七六二年)に出来たと伝えられる高田 西 田丁 大火に 軕 か、つ 猩 Q て焼失した。 軕

在の

西

[町軕は文政五年(一八二二年)に再建を始め、

天保三年

西町

軕

現

である(軕の

· 所在 者 高さ 六・五m 間口 二・九八m 奥高田西町 押越字町南八一三―九・八一〇―二 奥行 六.00

西 町 軕 (猩々軕) 正面左右の角の彫り物は、立川専四郎兄弟の手である。 二階の人形は賽振 (本文 5 頁に記す)

た。

安政四年(一八五七年)まで十三年か、って、 (一八三二年)に至る十年の歳月を費して一応出来上っ 漆塗りまで)その後天保十五年(一八四四年 慶応三年(一八六七年)から明治二年 彫物一式、 たもの かか 更に

 \coprod 彫物は、 んで現在の美観と偉容を備えるに至 塗装・金物・ が努力をつづけ、 と言うように、長い年月をかけて住民 上勾欄の金具一式、 九三〇年)に日覆破風の 七八年)に日覆裏の修復、 (一八六九年)までに下勾欄の青貝 0 彫 師忠兵衛 信州諏訪の立川和四郎兄弟と高 幕・ 0 優れ 簾など美しく、 軸全体の 明治十一年 た作品を篏めこ 金物が出来る 昭和五年(一 形態: 用 塗 材



「猩猩」および「仙人」の彫物(説明15頁にあり)

らせ方お囃等は、 大垣岐阜町の宮崎富次郎を聘して学んだと

軕の猩々人形は、

京都で拵え、

謡曲

[猩々に合せての踊

西 町 軕 \mathcal{O} 彫 刻 岐阜県重要文化財指定昭和三十一:二十四 木 木彫三九

刻はすべて欅の 刻界の巨匠で、 四郎四代目専四 通 壮 |称彫忠とも云う)である。 厳華麗 の美を誇る彫 61 郎 枚彫、 わゆる立川 (和四郎の弟) 刻は、 精緻を極め繊 流の 和四郎専四郎は共に近世 及び郷土の生んだ彫 信 正統を継い 州 諏 細 訪の 住 かも重厚である。 だ人である。 人三代目立川 師忠兵 わが 彫 彫 和

松 兄 和 四 郎 富重 弟専四. 郎 (富種))の作品 三九 面 面

換狹問 獅子 鷲 試 楽及 兀 夜 軕 面 面 用 花 水遊諸 鳥 鳥 六

面

乱

匹 面

支 兀 六 面 面

彫忠の作品

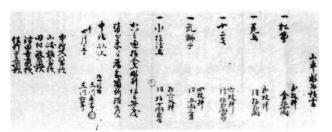
龍

獅

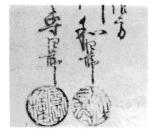
子

面

+



「山車彫物積書」中村準一氏蔵



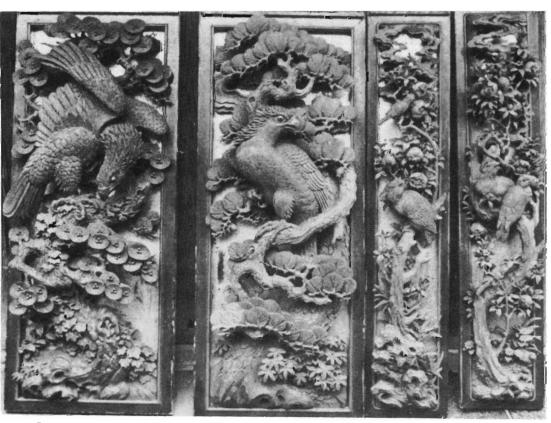
和四郎および専四郎の印影



「覚」中村準一氏蔵



松鷲狹間入の箱書



「松鷲」および「花鳥」の彫物 (説明16頁にあり)

東町軕(からくり林和靖軕

である。下河原の神楽連中の永代記録帳によれば、岩神社祭典を盛大にするため、東町に御旅所を建立してから住民に所属する軕である。この軕の始まりは、宝暦十二年に愛東町軕は、高田町東西の本通りのほぼ中央中町から東町の

高さ 六・五m 間口 二・九八m 奥判) ・所有者 高田東軕組(東町・中町)・所在地 高田四二二番地の一

行

四

| 宝暦十二西町東町之山形拵相始る本山ニ

十年程後の安永年間になって東町の軕が整ったものと思われとなっているので、宝暦十二年(一七六二年)に山形を拵え、相成リ候ハ安永次代ニ御座候」

る。

作が巧 ない。 度あって焼けているが、 食べさせようとする。 羽飛んで来て菜の葉を啄んで林和 を購入したものであると云う。 61 んだ鶴を追い払おうとする子 いう仙人が読書している所へ、 ない その後、 本軸のからくりは、 現在の みに操られている。 長 軕は名古屋市伝馬 はっ 13 間 には きりした事は その菜の 町 中国の林和 内 記 特にその 録 0 がも残っ 火災も度 葉を啄 供 町 鶴 わ 0 靖 が 靖 0 か 動 鶴 7 軕 b



東 町 軕(からくり林和靖軕) 正面は林和靖で鶴が菜を食えて与えようとしている ところ。

精巧に出来ている。

羽

ば

たきをさせるからくりは極めて

下 河 原 町 軕 (神楽獅子軕

·所有者 高さ六・一五三下川原区 地

m 間口二·九六m 奥行 三·五六 m

年(一七六二年)獅子軕を求め、 に若衆が獅子にわかを奉納したことが切掛けとなって、同十二 下河原の軕の始めは、 宝暦九年六月二十四日愛宕様の祭礼 それから毎年、 愛宕様を迎え

様の祭典を盛んにするため、 連中の「永代記録」に載っている。この宝暦十二年には、 祭礼を行い獅子軕を出すようになったことは、下河原の神楽 御旅所を東町に建立した。そし 愛宕

て、

下 河 原 軕(神楽獅子軕)

町、 この年からが高田三軕の始まりと考え てよいと思う。 又右永代記録によると同年に「西 東町も山形拵相始め」とあるので、

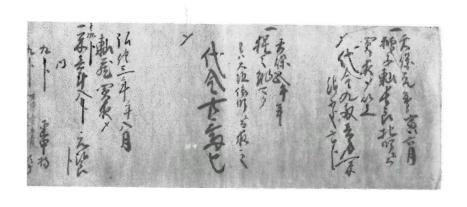
河原の軕も焼失し、 録帳によると、 寛政六年の高田の大火によって、下 その後は、 永代記

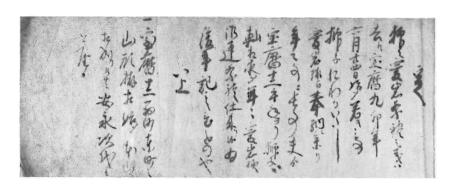
「天保元年寅六月

獅子軕長良北町二而買求メ以

上〆代金九両壱分 朱

とあるので天保元年に整ったようであ





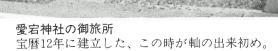


永代記録は安政2年以前を写し、以後はその 都度記入したもので裏に「神楽連中」とあり。

買求めたとあり、以上が下河原獅々軕の歴史の概要である。三両で買求めたとあり、更に同記録に弘化三年八月に軕蔵をる。又同記録帳に、天保五年に猩々緋幕を大垣俵町にて二十

附常盤町 軕(歌舞伎軕

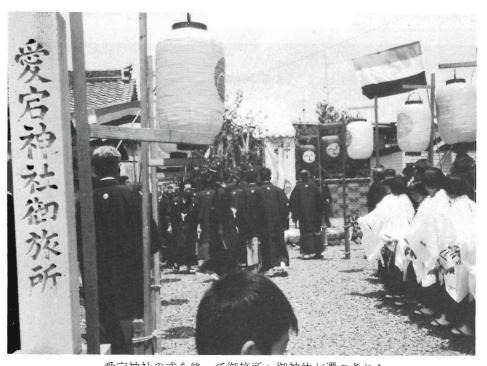
演じたものである。今回、県指定は受けなかったので省略する。は長浜から歌舞伎の師匠を招いて指導を受け、子供歌舞伎を昭和四十九年から祭典に軕を出さなくなったが、初めの頃





御旅所で下河原の連中が獅子舞をしている。

高 田 祭と曳 軕



愛宕神社の式を終って御旅所へ御神体が遷つされた ところ。午前11時から式、それが終ってから移動し 軕は夫々隨行する。

灯や 九時には 数万とも云われ祭の る。 まり午前十 に鎮まら あり、 が 姫 祭儀は早朝神社前で奉納せられる下河原町の獅子舞から始 この 雪洞に灯を点じて随行し、 威儀を正して警固の行列をしくみ東町の神幸神社 0 清楚な姿も神々しく振る鈴の音に気も澄む 御 ń 形代("還幸の儀 高田祭を境として農繁期に入るのでこの づいて神幸の儀が行なわれ各町 時から多く (御神体) デが 賑)が遷られる。 行 61 わ 0 れ同 神職 色で町中 じく三輛 0 方々にて例祭 時頃に御形代は が 輌 滿される。 0 0 軕 軕はこれに隨 内の委員氏子總 が 軕 0 祝詞 夜になっ 日 浦 再び本宮 ノペ \mathcal{O} 安の舞 イに 奉 人出 御 行 提 旅 は す

等

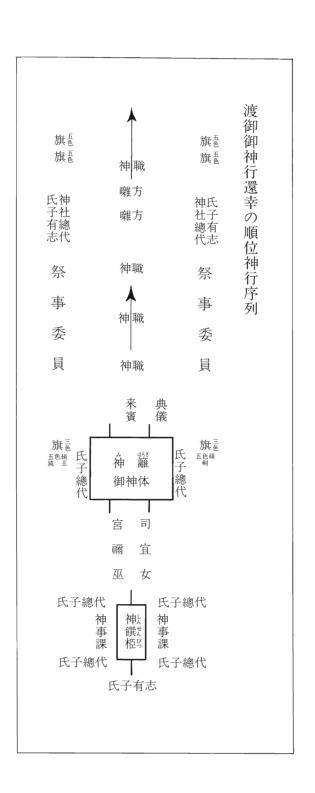
が

所

長奉行等によって、とり行なわれ、 むつまじく)と云う意味の挨拶が各軸の祭事委員長常設委員 その後各軸は古式を崩さず厳粛に曳 それぞれ各町内へと引上 別 n 0 儀 式 (本年も 仲



夜になって 9 時頃から還幸の儀が始まり、それが終ると本社に向って出 発、軸は隨行するその光景である。



げる。

古式を崩さず厳粛盛大に行われる年に一度の例祭は、氏子

が神に帰し氏子の心が神に統一せられて、何んの無理もなく

最も自然に、社会的に、秩序と礼儀の下に真の人間本来に復

帰する敬神崇祖の道である。

一輛 以上祭の概要であ 0 軕が上り下りして、 るが、 祭行事を行うのである。 高 田 0 町 通 ŋ は 狹 61 その 狭い 中 人ご

なけ 0 向 僅 様に仕組まれて、 土台の部分(軸 2 変換 であるという。 か八名の人で、 0 町 n ば軸 0 0 技巧 中 曳きは出来ない。 で三輛の軕がどのようにも自由 は 0 全国にも多くの例を見な 腰の部分)に当るところが自由 容易に方向変換が出 構造上特殊の技巧が施してある。 それで、 一来るの 高 61 田 に方向 という程精巧なも 0 である。 に回転出来る 輛 変換 は それで、 何 この方 が出 n Ł 来

軕の名称



(18)	17)	16	15	14	13	12	(1)	10	9	8	7	6	(5)	4	3	2	1	番号
棒	吹流	幕	前軕人	本軕人	見送	台	てこ	房	後	本	前	前水	前水	勾	袖	破	屋	名
頭			形	形	n	輪	棒		軕	車山	車山	引	引(脇水引)	欄(高欄)	板	風	形	称

仙人・猩猩の彫物のいわれ

(五頁 写真説明右から)

蝦 墓 仙 人

付く、 背に腰かけて肩に三本足の白い 明である。 中国渤海の人という。 たもので、 西 町 前軸の 動の試楽に用いられる替狹間で、 伝説では蓬髪裸足でザクロの実を手にし、 向 中国仙人列伝の「蝦蟇仙人」を示す。名は劉海蟾 って右側は大きな蟇を仙人が肩車した様を彫 背後の植物は一見「アオキ」に近いが不 ガマを負う蝦蟇を使って妖術 先の花鳥の位置に取 竹林を

鉄拐仙人

を行ったという。

き出すように描くのは魂を遊離する意味、自分の姿を空中へのり移った故事によるもので、跛で弊衣をまとい、小人を吐骸を火葬にしたため魂が帰れずやむなく、路傍の乞食の屍に誤水で、ある日老子を訪うたが、留守に弟子が勝手に鉄拐の一方左側は同じく隨代の「鉄拐仙人」である。姓は李、名は

吹き出すという。



高価なものである。に描いてししゅうがしてある。これは誰の作か不明であるが西町軕の見送り(うしろの垂幕)に鉄拐が小人を吐き出すよう

建紫

猩紫

であろう。 は南方「ユズリハ」後者は、 にも美味そうな表情が眼や口に表現されてい 酒を好むという。 は人に似て人語を解し、 た様を他方は大盃に満々と注がれた酒を両手に受け、 松鷲に替えて試楽に使う。 一方酒瓶の前に汲柄酌を肩に荷いで酒に酔 声は小児の如し、毛は長く朱紅色で、 酒をつくる「クワ」、 猩々は中国の想像上の怪獣で顔 る。 両下部はツタ 背景の植 61 か

松鷲及び花 鳥 0 影 物

(六頁彫物写真の説明

松

前 軕 0 左右 両 褄に 設け られる。 収 納箱書に左 の様にあって、

弘化 信 州 四丁 下 諏 訪 未年六月求之 住 彫 師味 几 郎 **枩鷲狹間** 松鷲狹間 入

五 弘化四年に仕 cm0 ケヤキの一枚板で二〇 上げてい る。 使用材は堅一三六・一 cmに及ぶ厚い彫りである。 cm 横 五 主題 五

水

游

諸

鳥

植物は、 等ではない ヨウマツ、 か、 方鷲は鋭 下部 の植物はシャクナゲの葉、 13 眼 鋭利な嘴、大形な翼など猛 ナツヅタ 鳥

ゴ

る 0 様を示している。 雄雌 対を靜と動で示す和 恐く本州山地にすむイヌワシと比定でき 遊郎 0 非凡 の才能である。

鳥

花

鷲と一 右下 はサ 又葉の茂りや枝ぶりなどリアルに彫り出している。 前 ーはコバ か、 軕 緒 0 他は に使用される。 正 面 左右 キクである。 上はサトウチョウ、 の最も目立つ位置におく、 花鳥のうち花はザクロで下部 特にはぜたザクロ 左側はテンジクバ は 昼 花実 間 0 鳥は正 曳 粒 0 軕 タン。 に松 方 粒 面

写真にのせなか った彫 Ď 物

支

干支の動物を彫 もり、 本軕 の掛輪台に用 61 られる。 各二種

0

干支を一組に合計六枚仕上となってい

獅 子

十二支と同規模の作品である。乱獅子は 前軕 乱 0 治輪 Ē 面 及びそれに続 く側 面 西川 に 取 付け が得意としていた。 B れるもので

六面に及ぶ、 軸の腰廻り部 水遊諸鳥とい 分の 四方にはめ込まれ、 うが石亀もあ る。 前後左右各四 オシドリ 面 計 力 7

ラヒワ等が低い位置であるから浅く彫られている。

けて、 0 市竹鼻上 所に集中してい + 物であることは前述の通りである。 彫 枚 以上 物は 0 軸彫物が完成している。 弘化四年(一八四七年)に一部仕上り 立 彼の手によるものである。 町の山車、高山市上二之町の山車、岐阜市本町 川和四郎兄弟の るのは他に例を見ないという。県下では、 影物 の概説であるが、 このように多くの作 (水野耕嗣・寒川清先生の調査書による,)西町軕の彫物については、岐阜高専 西 町 |軸を殆ど一手に引 嘉永年間までに三 すばらしい 品品 Ò が Ш . 収 力 車 受 島 剧

室

原

部

室原の熊野神社の祭と軕



室原区 約200戸 氏神熊野神社

立された。

の祭には住民和合し一体となって、 室原の熊野神社の祭は現在、 十月五日に行われているが、 井 畑 色目 東向

、三輛の軕が賑やかに神前に飾られる。

瀬古それぞれの灯明

(伊勢神宮への常夜灯)

広場から軕を曳

な祭となる。この軕は約二○○年前から、 い境内を埋め尽し、 いる)が行われ、 を招き子ども歌舞伎が稽古されて盛大に軕芸 昔から大豊作の年には、 村人や隣村の人、 この地方の農村には例を見ない 祭の二週 親戚の人々が集り来て広]間も前から長浜より 夫々長 11 程賑 間の先輩 P 師 か 匠

要請によって、 が力を入れ改善し維持した歴史と伝統がこもってい なお、この軕の保存については、 昭和五十五年九月一 日に室原曳軕保存会が設 県文化財指定につい

ての

文化二年(一八〇五年)に御堤普請後、この堤をお上から借があるので、これによって由緒がはっきりしている。色目の軕は文化五年(一八〇八年)の「御祭礼山奉加諸色帳」

・所有者 室原色目瀬古・所在地 室原五八五番地

奥行

六·五

色

目

軕

臥

龍

閣

臥 龍 閣(色目軸) 昭和30.10 子供歌舞伎 義経千本櫻川連法眼舘の段

しては大金で借金もしたと思われる。

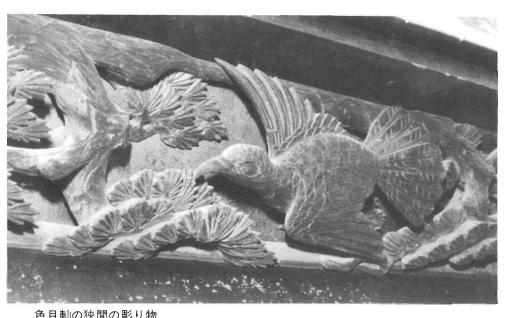
芸を行ったとあり。

この金子は当時

寄合相談し、軸を求めることに意見が東向の三瀬古に分かれ軸を所)に分けその金を頼母子講にして増やし、東向の三瀬古に分かれ軸を所)に分けその金を頼母子講にして増やし、り受けて豆を植付、金参両の金を儲け壱両宛三瀬古 (室原は井り受けて豆を植

まとまっ

衛門殿 買求め八月の祭礼 に同 を集め、 貳朱の大金を支払っている。 七月には再度家並に貳朱づ 役員は早速同十五日に垂井宿の儀 .宿の東町で古幕を金四両貳分にて の世話で軕を買い求め 同年八月までに金拾四 (出暦の八月十四日 つの寄附 両)に俄 貳分 同 年 金



色目軕の狹間の彫り物 彫師:佐竹民弥 町文化財指定 昭和47.11.9

その後毎月八文宛集めたことも、 又この集金は文化十一 年に及んだことが瀬古年行 この文書に書かれ 司 てい 0 帳 る。 面

に

てい

築後、 造した。 彫り物は佐竹民蔵(民弥とも云う)が安政三年に完成させて 治 几 る。 住込みこの三つの大きな仕事をしたと伝える。 だん腐朽し新造することになるが、 文化五年に関ヶ原 前 [十七年に町文化財に指定されてい 初年に行われた。このように長い年月かいって今日のような 色目軕の新造、 購入した軕は垂井宿の 民弥は、 それは西町の軕と考えられる。 0 嘉永六年頃に軕蔵を造り、 郷土史家の調査 大工は、 この頃の立派な彫師で、 さてこのようにして得た軕も年を経てだん 山中 江 州 藤川 . O により 何れの軕とも、 藤井太兵衛が新造 村の蔵之助で三年間蓮沢寺の わ かっ 続 てい それは色目の蓮沢寺の 現 る。 61 在の この て安政二年頃に はっきり載っていない るからである。 なお柱等の 軕の して 西 21頁写真参照 町 又軕 彫 いることが 軕 ŋ 漆 物 \mathcal{O} 塗は 狹* 間 は 軕 を新 閣 昭 前 明 改 垂 は 和 0

21

立派な軕に完成させた。

井 0 金を得て各瀬古 時の古文書によると、 畑 壱 軕 両宛分け軸 万 歳 購 入の 閣

色目 金参両 軸購入の 堤を借り受け大豆を植 資金とし

てい

. る。

又色目は総瀬古寄合い

軸を求める相

談が相成って、

0 軕

輛は、

色目

0

文化五年八月に求め

たのを初めに順

次水水

軸については

め三瀬古とも揃ったのではないか。そこで井畑

軕

0

赤

11

幕に楷書で次のように記して

ある。

直 ち 所所 に垂井宿 有者地 高さ 六・五m室原五五九番片室原五五九番片 購 入に出 地 掛け 間 口 てい 四 る。 m これから考えると室原 奥行 六·五

閣 (井畑軕) 歳 昭和30.10 子供歌舞伎 奥州安達ヶ原三段目 袖萩祭文の段

> 宝暦三癸酉八月吉旦 井畑 西濃不破郡室原 軕 万歳 閣 村 本郷 并畑

か 点があるが文政九年に新たに わからないし、 この幕の字 大破時文政九年丙戌八月新求之」 子右再建 は 暫 何年頃 又意味も判 中 絶 及 誰 断 が 水め 書 しに

61

た

と云う事は、

垂井宿の

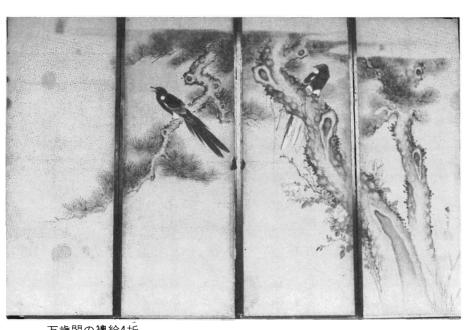
中

町 0

軕

ではな

た



万歳閣の襖絵4折 絵師:日比野鶴翁 町文化財指定 昭47.11.7

されているが、その入口の ていて当然のように思える。 あろう、それは、 してある。これは改築された以 えておこう、それは、 軕 0 四 枚折の襖は、 丁度軸を求めた年より年代が二、三年遅れ 現在の軕 高 田 柱 0 〉絵師日: に軸 前の 蔵は明治四十一年九月に改築 蔵の 比野鶴翁の絵で、 古 建立文政十二年と墨書 61 軕蔵 が 建 た年号で 松に 黒

ら旧

0

軕

が譲渡され、

それを文政九年に井畑瀬古連中が購

たこと畧間違い

ない

これに更に裏づけとなるようなことを、もう一つ付加

は、

Ξ.

年二月の垂井宿の大火事で焼けている

又

西町

0

軕は

旣

かと推察することができる。それは、

垂井東町の軕

には宝

に色目が購入しているので残るのは中町の軕であって、これ

文政の頃に新造したものだと地元民が稱していることか

文化財に指定されている。い鳥、裏に菊が描いてあるが立派なもので昭和四十七年に

町

東 向 軕 (鳳 凰

Щ

東向

軕

0

初めは、

左

0

表題の古文書によって、

「天保十二年

錺 Ш 残 金 奉 加 帳

丑三月吉日 東向惣連中

できる。 して、 新たに求めたのは天保十年(一八三九年)頃と推定することが この軕は大きく曳くの 購入先は、 江 州の醒ヶ井と古老達は伝えている。 が難儀で人々の 助けを得てやっ そ

とひいたと云う話が残っている。 大正十年九月二十七日の台

風によって軕蔵が倒壊した。これと軕ももろともにこわれた。

地 区民 が或る事情によって譲渡される話が伝わ 同途方に暮れている時、 度その年に赤坂町 東町 0

0

たの

で、

早 速

出

軕

· 所在者 高さ 七二m 盟室原東向瀬古室原六一四番地

向 たので購入した軕に合せ組立てたと云うことである。 大工は表佐の 61 て、 譲り受けた。 高 |木儀: こわれた軕の 作であっ 間口 三六三m た。 上部 尚、 奥行 軕 0 蔵 ちんは健全であ は 同

以上室原の三 輛 0) 軸は、 文化五年の色目 軸を始め逐次整備

工川地新松によって改築した。

+

四年に大

この 诗

されたが、 当 時 0 室原村 0 戸 数は約 七〇戸であった。

が三瀬古に分れ三輛 0 軕 を整備したことは、 並 大抵のことで

豊作の年は、 はなかっただろう。 三輛が子供歌舞伎の上演を競っ だが、 この三輛 0 軕 は、 て秋の 芸軸であって、 実りの祭

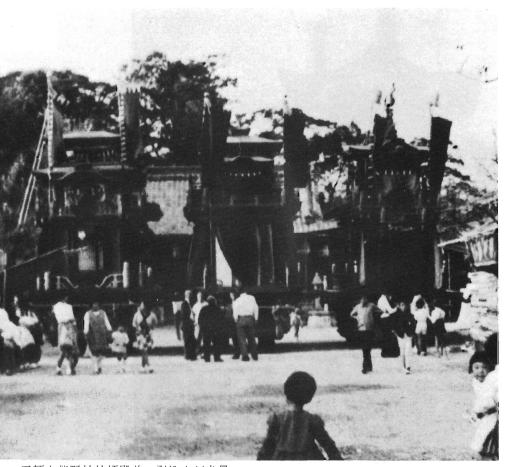
は

13



鳳 凰 山 (東向軸) 昭30.10.5 子供歌舞伎 一之谷嫰軍記三段目 熊谷陣屋の段

祭と曳軕の光景



三輛を熊野神社拝殿前へ引込んだ光景。

司 を氏神様へ曳込みの時刻や順序は、 青年二人は後見人と稱して黒の紋付に羽織袴で軕 軕にあって、お囃と軕の世話をする。 の正面に坐るのである。 人宛がこれに当るのである。青年は全員十数名が き手は、 青年はそこでお囃をして時を過ごす。この軕の曳 古の畧中心にある大神宮様の灯明の広場に置く、 のである。 に盛りあがってくる。 その音色は夜々村中に響き渡って祭の氣運が次第 は、青年(昔は若連中と稱した)が横笛を稽古して、 (五・六人) が相談し連絡してきめる。これには大 室原氏神熊野神社の例祭は、 祭がちかづくと十日ぐらい前から各瀬古で 夫々瀬古の男子全員で、 祭当日 には朝、 軸は総て青年が世話をする 各瀬古 軸蔵から曳き出し、 0 今は十月五日であ /灯明 軸に五、 各瀬古の年行 一番年長の 前にある軕 六十

それから後見人が揃って神前に神酒を供えると祭 曳き込み、 の式が始まる。 して、それが終るとおもむろに、一番から境内へ 三叉路に三輛が顔を合せ、 に当った瀬古の軕は一番軕となってリード役にな 当番と稱して、三瀬古が交代して当るが、大当番 に合せて、十三時半頃にお宮の境内の入口の前の 人宛の三組都合六人の後見人が礼儀正しく、 番軕、 拝殿正面二〇米位前の位置に向って左 中に二番軕、 神様の式典が十四時に始まるとそれ 右に三番軕の三輛が並ぶ。 各軸の紋付羽織袴の二 挨拶

挿絵の様である。その行列の順序や持ち物は練込。大豊作の年には、豊年を祝って軸芸を行なっが、この時は軸を神前に曳き込んだ後で盛大なうが、この時は軸を神前に曳き込んだ後で盛大な



室原熊野神社祭 子供歌舞伎を行う時の軸を曳込んだ後の練込。

時頃となり、 行事を行って丁度二十一時頃になる、 に献灯し、 する、そして後宴の日を待つ。 自分達の瀬古灯明のもとへ帰る。 同様に挨拶を交わして、三瀬古夫々、 曳き込みの時挨拶した位置まで戻り、 も最高潮となって、 白丸灯篭に献灯し(下写真)それで提灯破りと云う が境内の三軸の前に細引きを張って用意した百八 を先頭とするが、だいたい二十時頃に各軕に一 で全く終るのである。 をして二十一時頃に軕蔵へ曳き込み、 帰り 軕 神前の軕の曳き出しは、 お囃を始める。 青年はお囃も終えて、 愈々軕を曳き出すのである。 又これと別に、 後宴の日は 時刻は畧二十1 やはり一番軕 軕に泊り番を 其処で前と 祭は、 その時お囃 曳き別れて 三瀬古 お囃 斉

夜 影 (氏神境内)

八四六年)に三輛中の一輛が子ども踊りを行う次

によって明らかであるが、又その後も弘化三年(一

められ、その祝にその年に俄芸を行ったこと史料

祭と軕芸(子ども歌舞伎)色目軕が文化五年に求

右:色目軸 中:井畑軸 左:東向軸 十月五日祭



神社の境内に入る時、帰る時、三輛の代表者が軕からおりて一ヵ所に集 り、挨拶をする光景。

わかる。 伎を行った記録が り入用覚がきがある。この外にも豊年に踊りをし うである。又同じく安政六年(一八五九年)にも踊 てある。 は色目の年行司記録によれば、 ていることは、 宝暦十一年からの年行司記録を読んでいると その時の練りは「伊勢道中 芸題・役者名・年代を明らかにする。 に新造の軕で、 この時の古文書は三輛とも行っているよ 大正五年からは、 色目瀬古の年行司の申送帳 はっ 踊りをした事が記録されて 豊年の年に子ども歌 しているので一覧表に 安政三年 竹山」と明記 面 八五 に有

室原熊野神社祭礼 軸芸(子供歌舞伎)最近の奉納状況

一 昭 〇 和 · 五 一	一 昭 ○ 和 · 五	一 大 ○ 正 · 五 五	一 大 ○ 正 九 五	一 大 ○ 正 · 六 五	一 大 一 正 : 二	年次
川地一美、川 地勇、古川栄作高木正雄、川地義治、高木三之忠臣講釈土佐の段 鷹門 い住家の段	高木專三、村上重雄、川地文助大 矢清、佐竹正樹、川地新作一之谷嫰軍記三段目熊谷陣屋の段	川地利一、三輪四郎、川地定吉川地岩造、高木領一、高木真一近江源氏先陣舘の段	清水 靜 男、川地 数之高木 正 之、川地 二郎、川地 次郎扇矢熊谷陣屋の段	川地 周治堀 三郎、高木和吉、佐竹仁作恋女房染分たずな馬方三吉子別の段	高木育太郎 高木育太郎 高木育太郎 高木 文 吾、高 木 藤 一、高 木 俊 吉川地文五郎、高 木 武 夫、川地徳次郎源平盛衰記日向島子別の段	芸 題 役者名 敞 龍閣
長沢 弘、田中 清、田中兵一三輪新六、青木正六、高田初二桶狭間の合戦	佐久間与一、長 沢 数 男伊 藤 政 雄、近 藤 力 男、田 中 好 美一之谷嫰軍記二段目須磨の浦の段	高田 俊衛 信用 俊衛 高田 俊衛 で久間朝吉、青木 清、吉田 敏夫長沢 四郎、近藤 源市、高木 忠八長沢 四郎、近藤 源市、高木 忠八	田中五男、青木隆夫、高木秀夫近藤源吾、田中由之、田中敬一正清本城の段	田 中 清 一、佐久間武市伊藤角次郎、伊藤彦次郎、田 中 米 吉鎌倉三代記三浦之助舘の段	伊藤彦次郎、田中三佐吉 伊藤角次郎、近 藤 文 吾、川 地 庄 市奥州安達ヶ原三段目袖萩祭文の段	芸 題 役者名
多和田久雄、横田 求 川地源三郎、谷 信、高 木 肇勢州阿漕浦平治住家の段	大 矢 武 夫、谷 万 三、広 瀬 重 毅高 木 春 吉、川地喜代一、長 沢 弥 六一之谷嫰軍記流しの枝の段	横田長次、清水喜代一高木宇七、青木忠三、堀 七郎源平染分牡丹畑景清六代君の段	宮川梅太郎、田中安衛、岩田正直清水徳右衛門、川地光造 総本太閤記十段目尼崎の段	旧 井 孝 造川地文五郎、高木育次郎、川 地 東 一神霊矢口の渡し頓平衛舘の段	旧井孝造 川地庄市、川地利七家平盛衰記三島おせん舘の段	芸 題 役者名 力 歳 閣

一 昭 〇 · 五 七	一 昭 〇 和 · 五 五	昭和三三三	四 昭 • 和 初 三 旬 一	一 昭 ○ 和 • 三 五 ○
高木敏行④、川地竹司⑥、川地定門河波の鳴戸巡礼唄の段 一軸で一回宛三軸で行った ④は小学校学年	青木 富 雄、佐 竹 清、田中信一郎、母忠臣蔵七段目一カ茶屋の段祭であるが一つであるため公民舘で行った。	高木 善市、川地道夫、高田幸男、畑地道夫、川地道夫、川地義和、高木善市、州地道和、高木善市、地倉三代記三浦之助館の段 文楽歌舞伎人形 町文化財指定記念 室原	養老町合併 祝賀 室原余興 軕芸(子供歌舞伎)よ 養老町合併 祝賀 室原余興 軕芸(子供歌舞伎)よ 養老町合併 祝賀 室原余興 軕芸(子供歌舞伎)よ 養老町合併 祝賀 室原余興 軕芸(子供歌舞伎)よ しょう いんしゅう いんしゅん いんしゅう いんしゅう いんしゅう いんしゅう いんしゅう いんしゅう いんしゅんしゅん いんしゅんしゅん いんしゅんしゅんしゅん いんしゅんしゅんしゅん いんしゅんしゅんしゅん いんしゅんしゅん いんしゅん いんしゅん いんしゅんしゅん いんしゅん いんしゅん いんしゅん いんしゅんしゅん いんしゅんしゅん いんしゅんしゅん いんしゅん いんしゅん いんしゅんしゅん いんしゅんしゅん いんしゅんしゅん いんしゅんしゅんしゃんしゅんしゃんしゅん いんしゅんしゅんしゅんしゅん いんしゅんしゅんしゅんしゅんしゅんしゅんしゅんしゅんしゅんしゅんしゅんしゅんしゅん	三味線 伊吹 甚 蔵
定男⑤、高木元氣⑥、田中賴彦③、田字年	郎、伊藤明人、川地 等、川地正樹市、高田 徹 伊藤祝男男、三輪賢一、高田 徹、伊藤祝男のた。	線 堀 梅 玉畑 (で高田町へ行き行う) (で高田町へ行き行う) (では、 うてな 川 地 野 畑 梅 玉畑	三味線 豊沢門三郎 一之谷嫰軍記三段目熊谷陣屋の段 まけ 沢村訥茂丸 一次 藤 郁 雄、藤の局 青 木 一 一 大夫 青 木 声 玉 一 大夫 青 木 声 ま の 高田 幸 男 一 大夫 青 本 一 本 本 本 表 表 青 本 一 本 か に か に か に か に か に か に か に か に か に か	
中富芳④			清水 波夫 ⑪、風間 長沢 文次⑫隆 ⑪、義みね 川地 常雄	三味線 堀 梅玉 三味線 堀 梅玉 大夫 多和田九太夫 三役 振付 堀 梅玉 三役 振付 堀 梅玉 三役 振付 堀 梅玉 三役 振付 堀 梅玉 一

「やま」の字について

又江戸期の古文書を見ても殆どこの山車が使われている。しかし、いつの間にかこの地方では車 まについて色々の例を二、三挙げてみよう。 ぴったりしてかこの字が自然に使われる ようになったのではないかと思う。 ついでにここでや とか曳きやまという言葉が多く使われている。したがって辞書になくとも「軕」と云う字が我々に に山がくっついた「軕」と云う字が使われるようになった。又当地ではだしと云う言葉より、 い。そして山車の意味は祭に車の上に色々の飾り物をしてお囃子しながら曳き歩くものとある。 もこの字を使うことにした。 現今、当地方では「軕」をやまと読んで、この字が一般に使用されている。したがってこの冊子 しかし、辞書には「山車」をだしと読んで出ているが「軕」は見当らな

も本誌六頁に載っている。 文化五年の室原の古文書に「祀楼」又同文中に「山」が出てくる。嘉永二年に「軕」を使った古文書

山車の一種の「山鉾」は台の上に造り物があって、その上に鉾・薙刀などが立っているもので、

だんじり(壇尻・楽車・山車)祭礼の曳物の京都祇園祭の山鉾は有名である。

子を行い曳き歩くもので関東では山車・屋台など関西では山という。だんじり(壇尻・楽車・山車)祭礼の曳物の一種で車上に山・人物・ 種で車上に山・人物・草木・動物等を飾り立て囃